

医師を必要とするところで 必要な分だけ働いて



パキスタン、アフガニスタンでの20年余りに及ぶ医療活動、復興事業に携わっている中村哲医師。その活動は日野原重明先生にも評価されている。中村医師はどうしてアフガニスタンに行ったのか、中村医師にとって医療とは何か、川名真央さんに聞いてもらった。



東京慈恵会医科大学1年
川名真央

<尊敬する人>
中村哲医師
<将来の夢>
常に明るく患者さんを第一に考える医師になる
<コメント>
何事にも一生懸命がんばる。

■昆虫学に進みたかった

東京慈恵会医科大学1年
川名真央

川名 同じ医師という職業を目指す者として大変興味があるのですが、中村先生が医師を志したきっかけを教えてください。

中村 志すというよりは、自分が高校を卒業する頃は、日本は医師不足で困っていたのです。無医地区がたくさんありました。しかしほとんどの地域で頑張っていたのは、韓国人、中国人の医師でした。その時代背景の中で、日本人こそここで何かしなく

ちゃいけないんじゃないかという義務感が漠然とあったのです。

私は昆虫採集が好きで、農学部は昆虫学に進もうと考えていました。しかし、父親が厳しかったので、表向き正当な理由がないと、なかなか大学に行かせてもらえなかった。農学部は当時入りやすかったんです。農学部から医学部に転部するのは難しかったが、逆に医学部から農学部へ転部するのは割と簡単にできました。

ベシャワール会現地代表
中村 哲

×

た。それで、医学部に進もうと親を説得して入ったのです。

川名 途中、農学部に転部しようと思わなかったのですか？

中村 なぜかそうならなかったんです。川名 先生の恩師である藤井健児氏から多大な影響があったと本で読んだのですが、最も影響されたところは？

中村 私が行っていたのは西南学院というミッション系の学校です。そこでは教会に行くことが義務とまではいかなくとも、勧められていました。私も行く機会が多く、たまたま最寄りの

通っていた教会に藤井先生がいらした。藤井先生は全盲で、中途失明でした。しかし、先生はご自身の苦労話はもちろんのこと、悲惨な体験話とか全くそういう話をされません。普通、そういう人は自分のことを言う人が割と多いと思うのですが、藤井先生は全くそういうことがなかった。むしろ、そんな状況下でも大変面白い方でした。この人はどうしてこんなに明るいのだろうか、興味を抱きながら付き合ってきました。

■時流に流されないこと

川名 内村鑑三氏の『後世への最大遺物』に感動したと本で読みました。私自身もなるほど、と思うところがあったのですが、中村先生が一番関心があったのはどこでしょうか？

中村 私はすべてにおいておもしろい書物と思いました。あの当時の時代背景もあるのでしょう。一人の人として

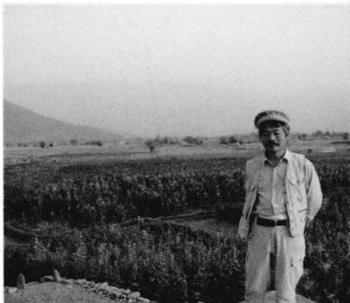
生まれて、生きて、そして何か目的を持って、「皆がそう言うからそうする…」などと時流に流されないということが大切なんだと、非常にインパクトを受けました。皆がやるから自分もなんとなくやる、流れに乗っておれば安全だ、という生き方だと、自分の人生を棒に振ってしまうんだと気がきました。

■周囲の理解に恵まれアフガニスタンへ

川名 アフガニスタンで活動をしようと思ったきっかけですが、普通の人だとなかなかやろうと思っても行動に移せないと思いますが、そこまで行動にさせたのはなぜですか？

中村 運もあったと思います。したい

と知っている人はたくさんいても、実際にはなかなかできません。家族の生活もあり、周りの人間関係もある。それを振り切ってまではできないという人が多いですよね。その点、自分は振り切れる立場に恵まれたと思います。



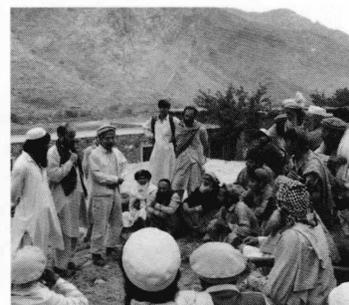
ダラエ・ヌール試験農場にて。



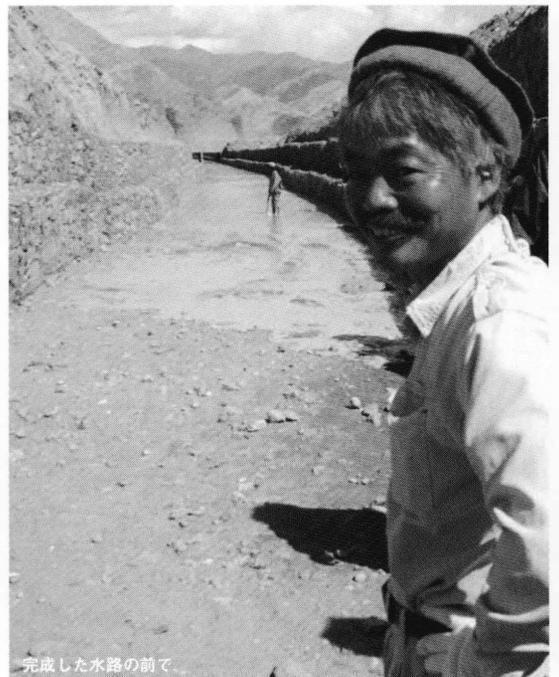
診察を受ける村人たち。



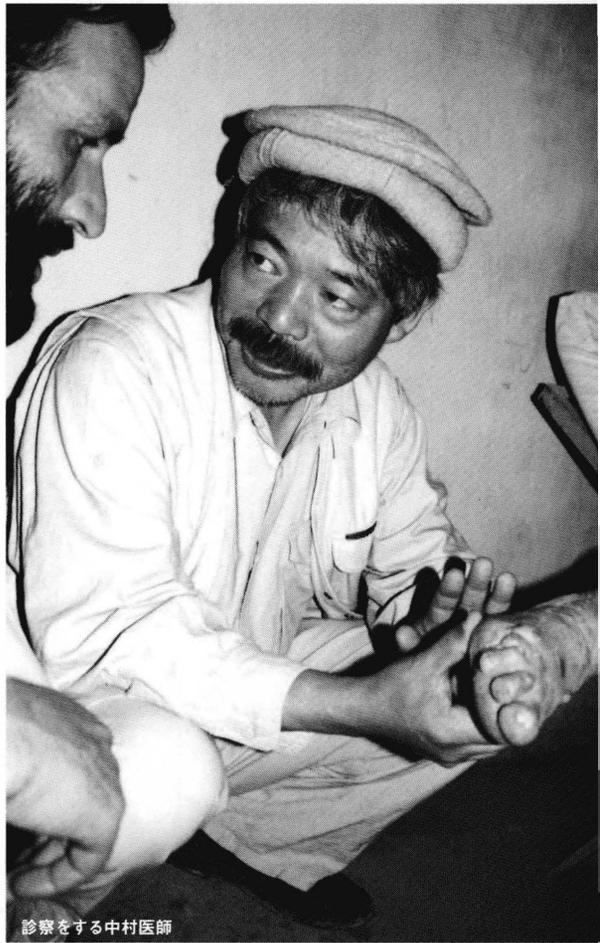
灌漑用井戸を見つめる中村医師。



オキナワ・ピースクリニック搬入式。



完成した水路の前で。



診察をする中村医師

性格だとか周囲の理解も含めてのことですが。

川名 家族に言うにしても、自身自身に強い思いがないと難しいと思います。その点で、中村先生ご自身の当時の状況を教えてください。

中村 うーん、そうですね。家族次第だと思います。私は、自分の意地を通すためにいろんなところに迷惑をかけてやるというのは好きではないんですね。あの当時、アフガニスタンに行くことに関しては、親としては心配だけれども、反対はできないということ

■モンシロチョウを求めて

川名 中村先生は、「体力には自信がある」と口にされますが、学生時代に何かやられていたのですか？
中村 山岳部に入って山歩きをしていたので、歩くことは苦になりません。

でした。今とは時代が違いますが、妻にしても、いいか悪いかは別として、好きだろうが嫌いだろうが主人の行くところには付いて行くというのが当たり前で：多分、現実はこちらだと諦めたというのが実情です。

妻が今でも口にするのは、「あなたと結婚して、『波乱万丈』だったわ」という言葉です。子供を持つ母親としては、普通は安泰な生活を望むわけでしょうが、私の妻はそういう欲望が強くなかったということが、今の私で見られる結果でしょうね。

しかし、昆虫採集のための山登りを好んでいました。

川名 蝶や山が好きだと聞きました。蝶の種類は何でしょうか？また、登山隊の医師として行ったときに、蝶

は見るのができたのでしょうか？

中村 昆虫全般が好きです。蝶の中でも、ヒンドウクシユ山脈やシベリア、ヨーロッパアルプスには氷河時代の遺物と言われている蝶（バルナシウス）がいて、その蝶を見たかったというのがアフガニスタンに行った一つの理由です。

専門的な話になりますが、皆さんもモンシロチョウは知っていますよね。かつてモンシロチョウの原産地はパミール高原という説がありました。ちなみに日本のモンシロチョウは標高500m地帯でしか生息していません。それより高いところになってしまうと、食べるものはあるんですが、エゾスジクロシロチョウに取って代わるのです。

しかし、パミール高原になると、標高が3000m近くになるので、そこでもモンシロチョウが本当にいるのか、蝶に限らず、昆虫は食べるものが決まっていますから、シロチョウ科の

■本当の意味でのサイエンティストに

川名 私は一昨年、長島愛生園という岡山県にあるハンセン病の施設に行きましたが、訪問する前に、周囲から行っても大丈夫なのか？と心配されました。中村先生が行くときも、そういった差別はあったのでしょうか？

中村 私はあまり感じなかったです。それでも時代の偏見というのはあったようで、ハンセン病も一つの偏見の対

蝶ならば十字花（ジュウジバナ）科と違って大根、菜種（ナタネ）だとか特定の植物を食べるんです。その植生と異なりますか、植物と一緒に日本に渡来してきたというのが、一般的な説になります。3000mの標高に住んでいたとされていたモンシロチョウがいかにして500m以下の低地に住み着くようになったかというのも一つの疑問なので、その『鍵』がああ辺にあるような気がして、興味を持ったというのが、現実です。

川名 その『鍵』は見つかりましたか？

中村 『鍵』にはなりませんでしたが、実際、野草としてヒンドウクシユ山脈の中に菜種（ナタネ）が咲いていました。標高4000Mのところになくさんあったし、蝶もいました！蝶は鑑定してもらったら、間違いなかった。まあ、それ以上に研究の進展はありませんでしたが：。原産地から菜種（ナタネ）と一緒に渡来してきた、という可能性も有り得ると考えたのです。

象となっていました。今でもあるんですよ。エイズの患者に対する偏見とか、自分はそのような病気にかかりたくないという不安がそうさせるのかもしれないという不安が、そういう偏見を持たないというのが、本当の科学サイエンスだと思うので、医師は本当のサイエンティストになってほしいと思います。

時流に流されず 自分の道を行く医師に

川名真央

日本の医師とは違うイメージ

中村哲先生に初めてお会いするまでは、アフガニスタンの貧しい人達―長い間、医師がいなかったために病気になっても医療行為を受けられなかった人達のために、無償もしくは安い費用で医療行為を行ったり、また医療の前にまず何が必要かを考えて、井戸を掘ったりするなんてどんなに凄い人なのだろうと思ひ、緊張していました。

しかし、一目見た瞬間その緊張はほぐれました。というのは、中村先生は私が抱いている日本にいる一般的な医師のイメージとは違っていたからです。私の一般的な日本の医師のイメージというのは、どこか近寄り難い雰囲気があり、Yシャツにしわ一つないような清潔感や威厳があるという感じでした。

しかし、中村先生は、ネクタイをしていなくて、髪もあまり整っていないくて、ひげを生やしていました。とても優しいおじいちゃんという感じで、

近寄り難い雰囲気は全くありませんでした。また、話し方がとてもゆっくりして落ち着いているので、先生の「時流に流されず自分の道を行く」という人間性を肌身で感じました。その、優しい先生の人間性は、至るところで現れています。

社会の役に立つ人間になれ

以前、このようなことがあったといます。ネパールのカトマンズで先生になった女の子が貧しい家の出で、その子が「日本に行つてぜひ勉強がしたい」と言ったことがきっかけで、中村先生はその子のために日本までの航空賃を出し、日本語学校を探して歩きました。しかし、女の子は来日して2ヶ月後に父が亡くなったといつて帰国し、それから連絡が途絶えてしまったそうです。

つまり、騙されていたのです。それでも、その女の子を信じる中村先生の情の深さは誰にも真似できないものだと思ひます。中村先生自身、や

りたいと思つたことはやり遂げるといふ考えを持っているから、国の事情等でやりたいことができない環境にある子に手を差し伸べてしまふというのは理解できませんが、何よりもこれは先生の優しさの象徴だと思います。

そんな優しくて偉大な先生ですが、初めて登山隊付きの医師としてパキスタンに行つた動機は「自分の好きな山も見られるし、蝶もいる。一生に一度は行ってみたい」というだけのことでした。中村先生は、そんな重大なことも軽々しく決めたわけではないと思ひますが、自分の好きなものが見られる、などという好奇心で決断してしまふ一面も持ち合わせています。

自分で道を探し、信念を貫く

さて、その先生の過去には、どの

ようなことがあったのでしょうか。まず、中村先生は小さい頃からよく父親に「早く大きくなって、日本の役に立つ人間になれ。親は捨ててもいい、社会の役に立つ人間になれ」と言われていたそうです。実際そこまで言える親は少ないと思ひます。社会の役に立つような立派な人間に息子が育つならば、自分のことはどうでもいと言え、中村先生の親の意識の高さは凄いと見られます。そのような親に育てられたからこそ、中村先生も普通の人よりも意志が強い人になったのかもしれない。

また、先生の祖父は「流れ者であろうと、物乞いであろうと、人を差別せず、蔑まれる階層にこそ手を差し伸べてやること」を当たり前とする考え方を持っていました。中村先生はその考え方を受け継いでいるのだと思ひます。

ペシャワール会のおゆみ

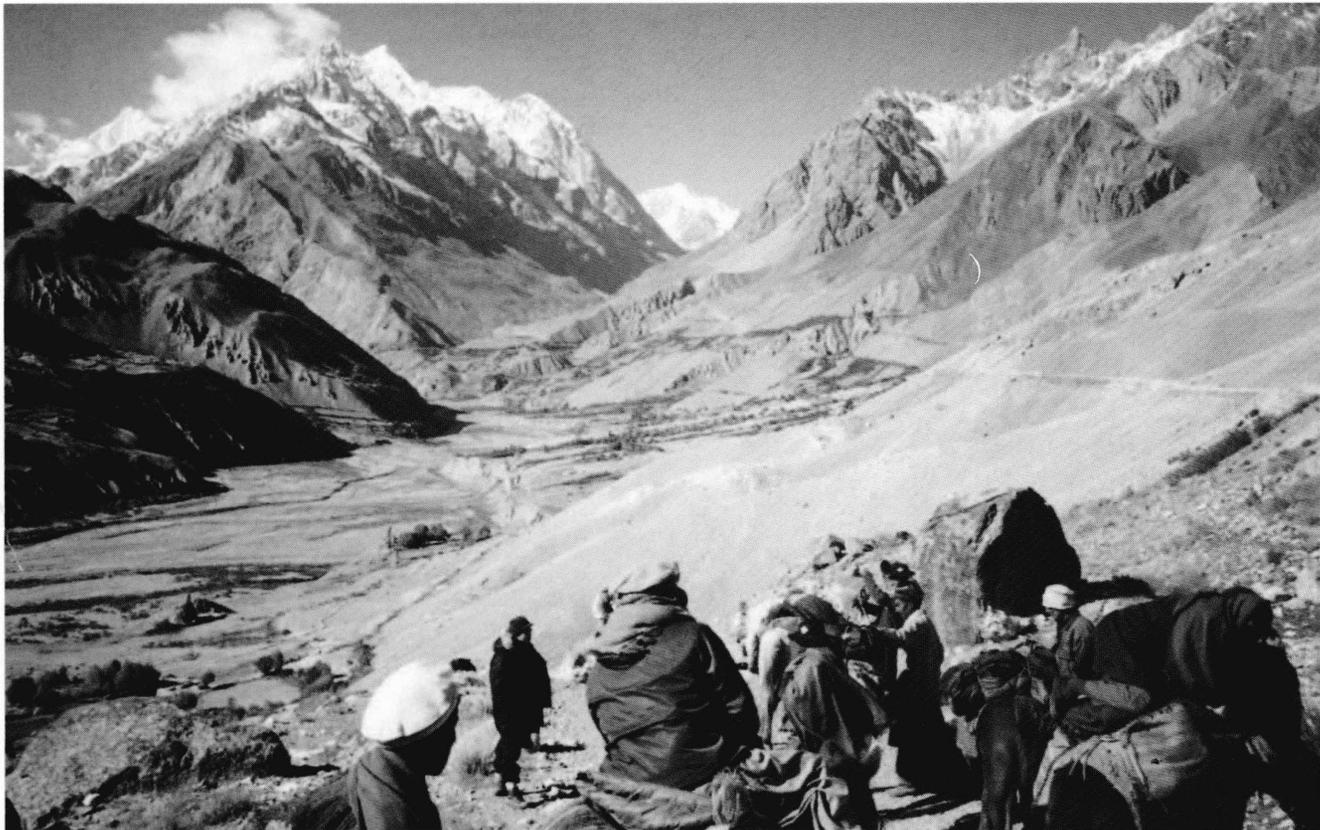
ペシャワール会の中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成され、1984年より現地活動を開始した。同年、中村医師はパキスタンのペシャワール・ミッション病院に赴任し、まともな医療器具も手術施設もない医療環境の下で、治療活動を続けた。

86年よりアフガン難民への国内診療を開始し、さらに、アフガニスタンにも活動範囲を広げ、91年12月、アフガニスタン国内の活動拠点として、ダラエ・ヌールに最初の診療所を開設。以来、アフガニスタン北東部の3診療所を中心に、山岳無医村での医療活動を続けている。

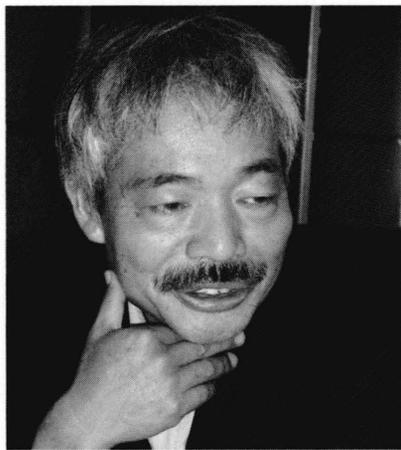
93年、ダラエ・ヌールで悪性マラリアが大流行し、治療薬の資金を確保するため、大々的な募金活動を展開した。全国から2000万円以上の寄付が寄せられ、2万人もの患者の命が救われた。

98年には恒久的な基地病院としてPMS（ペシャワール会医療サービス）病院をペシャワールに建設。2000年、大干ばつに見まわれたアフガニスタンの村々で水源確保事業を開始し、井戸の掘削を中心にカレズ（伝統的な地下水路）の修復を図る作業を現在まで継続している。

01年10月には「アフガニのちの基金」を設立し、空爆下、アフガニスタン国内避難民への緊急食糧配給を実施。02年2月までに15万人に配給。現在は、その基金をもとに、総合的農村復興事業「緑の大地計画」を始めている。



移動診療—山を越え村から村へ



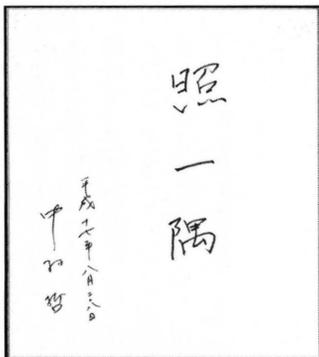
中村・哲 (なかむら てつ)

九州大学医学部卒。
ベシャワール会 現地代表・PMS総院長
専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。
国内の病院勤務を経て、1984年バキスタン北西辺境州の州都ベシャワールに赴任。以来、20数年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした貧民層の診療に携わる。86年からはアフガン難民のために事業を開始、アフガン北東山岳部に3つの診療所を設立。2002年春からアフガン東部山村での長期復興計画「緑の大地計画」を継続、03年春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診察数約13万人（2004年度）。

このように、中村先生の過去をたどってみると、今のような活動ができるのは、すべての条件がうまく重なったからこそできたのだと思います。まず、中村先生自身の型にはまらない自由さ、やると決めたことはやり遂げるという強い意志、優秀な頭脳、また先生の祖父母から受け継いだどんな人にも差別することなく手を差し伸べるという精神。一つも欠けずにこれらのすべてが備わっていたからこそ、先生は先生なのだと思います。これから先、中村先生のように

中村哲先生の優しさ

ガニスタンで今のような活動を行ったり、ハンセン病がある種の時代の偏見となっていた時代でも、ハンセン病の患者さんに対して差別をせず、ハンセン病の治療を行なっていたのだと思います。



ある一つの考え方や見解に焦点を当てる。
＝時流に流されず自分の考えを大切に。

アフガンで医療行為を行う人がいたとしても、先生ほどの人格者はおそらく出てこないでしょう。また、将来医師を志す人間として、私も先生のように他の人がやらないこと、本当に必要なことをやれる医師になりたいです。決して中村先生と同じ道ではなくても、自分で道を探し、先生のように信念を貫けるようになりたいと思います。